中日新聞

はぐくむ

手紙マナー 暑中見舞いで

暑中見舞いを送り、近況を伝え合う時季になった。だが、郵便はがきの書き方を知らない子も多い。子どもたちの手紙事情と書き方のこつを紹介する。

（安食美智子）

子どもを対象に授業

「見本を見て、自分で書いてみてください」

夏休み前の東京都練馬区立仲町小学校。三年三組の児童三十八人を前に、担任の藤垣結髪教諭（三二）の声が響いた。プリントには、何も書いていないはがきの表面が二つ。児童はその左側の見本を見て表書きに挑戦した。

一人が「（郵便）番号って何？」と質問。他の児童は宛先の場所に、表書きの必要事項を小さい文字で全て書き入れた。何も書けない子もいた。藤垣さんは文字の配置、大きさをはがきの拡大コピーで説明。植木裕太郎君（八つ）は「宛名の大きさが難しい。おじいちゃんに送りたい」と満足げ。山本さらんさん（八つ）は「面白かった」と話した。

児童は今後、祖父母などに暑中見舞いを送る予定だ。藤垣さんは「はがきの存在を知らない子が八人もいて驚き、企画した。教科書だけでは不十分なことも教えなければ」という。

「郵便番号の欄に携帯電話の番号を書くなど、表書きができない子が増えている」と語るのは、「日本郵便」切手・葉書室の山下健一郎担当部長。二〇〇九年度の全国学力・学習状況調査で、六年生の三分の一が正確に表書きができなかったのを受け、同社は一〇年度から小中学生対象の「手紙の書き方体験授業」を全国で開催。東海三県では昨年度、計六百十五校で実施し、本年度は高校も含む計八百六十校（二十三日現在）で予定する。

昨年度の同社調査では、六年生で自分の住所を言えない子が二割も。山下さんは「プリンターの普及などが背景にある。手紙の表書きでは相手の名前の方が差出人の名前より大きく書くが、メールでは同じ。相手への敬意を感じる部分が失われてしまう」と危ぶむ。

３年生に暑中見舞いの表書きを指導する藤垣結髪教諭＝東京都練馬区の仲町小学校で